

2015 年度 修士論文

MiLB 本拠地の立地条件と観客増員策の
日本プロ野球 2 軍での実行可能性
Better Way for NPB Minor Teams in Location and
Spectators considering the success in MiLB.

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5015A318-2

福田 岳洋

TAKEHIRO FUKUDA

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	背景	1
第1節	研究の背景	1
第2節	日本プロ野球（NPB）2軍の構造の概要	1
第3節	アメリカマイナーリーグ（MiLB）の構造の概要	2
第4節	元 MiLB 球団職員へのインタビュー	3
第5節	先行研究	4
第6節	研究の目的	4
第7節	研究の意義	5
第2章	研究手法	6
第1節	MiLB チームの本拠地に関する調査	6
第1項	対象	6
第2項	調査項目	7
第2節	NPB2 軍の本拠地に関する調査	9
第1項	対象	9
第2項	調査項目	9
第3節	NPB 現役プロ野球選手への意識調査	11
第1項	対象（2015 年 11 月現在の NPB 登録選手）	11
第2項	調査項目	11
第3項	分析方法、倫理的配慮	13
第3章	研究結果	14
第1節	MiLB チームの本拠地に関する調査	14
第1項	都市人口	14
第2項	MLB 本拠地との立地関係	16
第3項	スタジアム規模と稼働率	19
第4項	試合日程と観客動員数	21
第5項	その他プロスポーツとの関係	23
第2節	NPB2 軍の本拠地に関する調査	26
第1項	都市人口	26
第2項	1 軍本拠地との立地関係	27
第3項	スタジアム規模と稼働率	29
第4項	試合日程と観客動員数	30
第5項	親子球場開催に関して	31
第6項	2 軍戦 地方開催	32
第7項	1 軍戦 地方開催	34

第8項	その他プロスポーツとの関係	34
第3節	現役プロ野球選手へのアンケートによる意識調査	36
第1項	試合環境(観客数、試合数、移動)	36
第2項	練習環境(立地条件、指導)	36
第3項	2軍におけるファン獲得(イベントへの参加意思の有無、必要性)	36
第4章	考察	39
第1節	MiLBの成功要因	39
第1項	立地条件からみる成功要因	39
第2項	試合日程とスタジアム規模からみる成功要因	40
第2節	日本との比較	41
第1項	立地条件	41
第2項	試合日程とスタジアム規模	42
第3節	日本の2軍の再立地の可能性	43
第5章	結論	44
	謝辞	45
	参考文献	46

図表目次

図 1	MLB および MiLB 構造	2
表 1	インターナショナルリーグ	6
表 2	パシフィック・コーストリーグ	7
表 3	イースタンリーグ	9
表 4	ウエスタンリーグ	9
表 5	2軍環境に関するアンケート調査	11
表 6	インターナショナルリーグにおける本拠地と人口	14
表 7	パシフィック・コーストリーグにおける本拠地と人口	15
表 8	インターナショナルリーグにおける MLB 本拠地との位置関係	16
表 9	パシフィック・コーストリーグにおける MLB 本拠地との位置関係	17
表 10	MLB 及び、MiLB の本拠地球場を置く州	18
表 11	インターナショナルリーグにおけるスタジアム平均観客動員数と稼働率	19
表 12	パシフィック・コーストリーグにおけるスタジアム平均観客動員数と稼働率	

.....	20
表 13 インターナショナルリーグにおける開始時間.....	21
表 14 パシフィック・コーストリーグにおける開始時間	22
表 15 その他スポーツとの関係	24
表 16 稼働率上位 5 チームの概要.....	25
表 17 都市と人口	26
表 18 1 軍、2 軍 都市間距離.....	27
表 19 1 軍及び 2 軍の本拠地.....	28
表 20 スタジアム規模と可動域	29
表 21 ナイター開催試合	30
表 22 1 軍本拠地での開催	31
表 23 2 軍地方球場での開催.....	32
表 24 2015 年度 2 軍公式戦の開催球場.....	33
表 25 2015 年度 1 軍公式戦の開催球場.....	34
表 26 日本におけるプロスポーツ	35
表 27 2 軍環境に関するアンケート調査の結果.....	36

第1章 背景

第1節 研究の背景

国内外における多くのプロスポーツには下部組織が備わっている。筆者自身もプロ野球選手として1軍と、下部組織である2軍の両方を経験して、2013年に引退した。

1軍と2軍両方の組織を経験して自身が一番に感じたことは試合における観客数の違いであった。実際、2015年シーズンでの1軍の平均観客動員数は28,240人、2軍はわずか745人であった。

一方、アメリカのメジャーリーグ（以下、MLB）の下部組織にあたるマイナーリーグ（以下、MiLB）に目を向けると、2軍にあたる3A球団においても一万人近くの平均観客動員数と、年間10億円を超える収入を誇る球団も存在した。

そこで、なぜ同じプロ野球の下部組織であるMiLBには多くの観客が入るのであろうか。という疑問を持つにいたった。

毎年の平均観客動員数が9,000人を超えるMiLB球団に勤めていた元職員によると、MiLBでは観客を増やすためにオフシーズンを使って地域イベントに球団のマスコットキャラを用いて球団の認知度を上げる努力や、観戦に訪れたファンに対しては試合観戦だけではなく+αとしてのサービスをあげてを念頭に活動を行っているといった、日本のプロ野球ではあまり熱心に取り組まれていない手法が取り入れられていることがわかった。

そこで、試合において大勢の観客の中でプレーできるということが、選手にとってのモチベーションアップにつながることや、2軍の観客数の増加が球団の普及にも好影響が期待されることから、2軍の今後の発展の必要性を強く感じた。

第2節 日本プロ野球（NPB）2軍の構造の概要

日本においてプロ野球とは日本野球機構（以下NPB）に統括されているリーグのことを言い、現在のプロ野球は12球団で構成されている。セントラルリーグとパシフィックリーグの2リーグにわかれて年間143試合（2015年シーズン）のリーグ戦を行っている¹。

プロ野球の支配下選手契約数は70人と決まっており、2005年より新しくできた育成選手契約の選手を含めるとシーズン中は各球団80人前後の選手を抱えていることになる²。そのため1軍と呼ばれる組織と、2軍と呼ばれる下部組織を各球団備えている。1軍の試合に出場するためには1軍登録されていなければならない、1軍の選手登録人数は28人のため、2軍には常時50人前後の選手が登録されている。

2軍の選手は1軍選手とは別のリーグで構成されており関東から東の球団で構成された、イースタンリーグと、名古屋から西の球団で構成されたウエスタンリーグにわかれている。

そのため1軍と2軍は同じ球団ではあるが、全く別のリーグで試合を行っており、現在の2軍は1軍で活躍できる選手へと成長させるための育成機関として位置付けられている。

現在2軍では主に育成を目的にしているため、2軍のことをファーム＝農場という言い方をしており、選手を育てるための機関として設置しているという見方が強い。

第3節 アメリカマイナーリーグ (MiLB) の構造の概要

アメリカにおいてプロ野球とは、MLB と、MLB 球団と傘下協定を結んだ球団によって構成された MiLB と呼ばれる下部組織の事を表わしている。そのため MLB と傘下協定を結んでいない球団によって構成されたリーグのことを別に独立リーグと呼んでいる。

現在の MLB の球団数は 30 球団あり、1876 年に誕生したナショナルリーグ (以下、NL) と、1901 年に誕生したアメリカンリーグ (以下、AL) の 2 リーグ制で、年間 162 試合戦っている。

MLB は毎年 6 月の月上旬に開催される MLB ドラフト (全米ドラフト) 会議によって指名を受けた選手によって構成されており、一般的にドラフト指名された選手は、各球団とマイナー契約を結び、球団傘下の MiLB 球団でプレーする。

そのため MLB 球団は 30 球団すべてで MiLB と呼ばれる下部組織を持ち、選手を派遣し育成を行っている。最も MLB に近いリーグをトリプル A (3A) と呼びそこから、ダブル A (2A)、アドバンスド A (A+)、クラス A (A)、ショートシーズン A、ルーキー・アドバンスドリーグ、ルーキーリーグの 7 階級で構成されている。

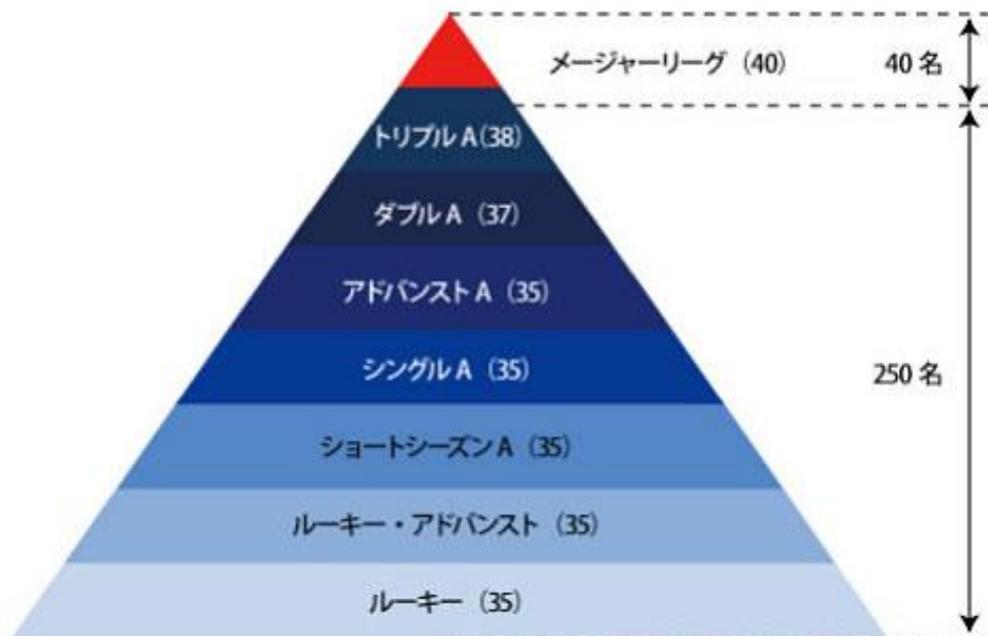


図 1 MLB および MiLB 構造

トリプル A にはインターナショナルリーグと、パシフィック・コーストリーグの 2 つのリーグがあり、ダブル A はイースタンリーグ、サザンリーグ、テキサスリーグの 3 つのリ

リーグ、アドバンスド A はカリフォルニアリーグ、カロライナリーグ、フロリダステートリーグの 3 つのリーグ、クラス A はサウスアトランティックリーグ、ミッドウェストリーグの 2 つのリーグによって構成されている。

MiLB の中でもクラス A までは、各階級に MLB30 チームの傘下である下部組織が 1 つずつ集まって構成されている。

さらに下の階級では、ドラフト会議の中でも下位指名された若い選手を中心に構成されている。ショートシーズン A にはニューヨーク・ペンリーグ、ノースウェストリーグの 2 つのリーグが全 22 チームで構成されており、ルーキー・アドバンスドリーグにはアパラチアンリーグとパイオニアリーグの 2 つのリーグ、全 18 チームで構成されている。

さらに下位の階級であるルーキーリーグはアリゾナリーグ、ガルフ・コーストリーグ、ドミニカン・サマーリーグ、ベネズエラン・サマーリーグの 4 リーグ、全 69 チームで構成されている。

このように MLB、MiLB を合わせると 259 チームあり、いかにアメリカ全土に野球が普及しているかがわかる。

MLB では公式戦に出場することのできる 25 人の選手枠の事をアクティブロースターと呼び、ワールドシリーズなどのポストシーズンに出場するためには 25 人枠に入っていないなければならない。また、MLB 各球団が支配下におくことの出来る 40 人の選手枠の事をロースターと呼ぶ。25 人枠に入れない 40 人枠の選手は MiLB で他のマイナー契約の選手と共に MiLB の試合に出場してメジャー昇格を目指している。

そのため、アメリカでは出場機会を求めて、自分を必要としてくれる球団を探そうと移籍が活発になるのである。

第 4 節 元 MiLB 球団職員へのインタビュー

今後の日本球界の発展を考える上で、MLB を頂点として、7 つの階級を持つまで成長した MiLB について、実際に 3A のリーハイバレー・アイアンピッグスの元球団職員に対してインタビュー調査を行った。そこから MiLB の球団職員として最も力の入れていることは観客動員数をあげる努力であることがわかった。

リーハイバレー球団では地域住民との関係性を高めるためには、“Family”、“Friendly” の精神が最も大事であるとあった。下部組織は MLB のような TV 放映権料が入らないため、実際に球場に観戦に来るチケット収入などが最も大事と考えていた。

実際に収益構造について聞いたところ、チケット収入、グッズ、飲食収入、スポンサー収入がメインであるとあった。観客動員数を増やす事はそれらすべてに影響するため、集客術に関して球団職員は日々試行錯誤しているとあった。

観客動員数をあげるために具体的な制作として球場のテーマパーク化による集客、地域イベントへの積極的なマスコットキャラの稼働、毎試合テーマナイトの開催、観戦者に +α としてグッズ等の提供、試合中のイベントの充実などをあげていた。

さらに特徴的な取り組みとしては+αの提供に関して工夫をしていた。MiLBでは球団グッズを買ってもらいたいため、+αを野球用品のプレゼントではなく、全く関係のない生活用品の提供などを行っていた。こうすることによって球団グッズの収益が落ち込むことを防いでいるとあった。

以上のように元リーハイバレー・アイアンピッグスの球団職員へのインタビュー調査からMiLBの球団職員が最も力を入れるべき点を知ることが出来た。そこからリーハイバレー球団における集客術を大きく4つに分けることが出来ると考えた。

1. 毎年リニューアルすることによる集客術

球場の作りに毎年、変化を加えることによって地域住民の関心を集めている。

2. 年間通しての集客術

オフシーズンにも地域イベントを積極的に開催しており、マスコットなどを利用した地域密着・貢献活動を行うことによって地域住民への認知度をアップさせている。

3. シーズン中の集客術

本拠地球場で行うレギュラーシーズン「全試合」にテーマを持たせ、何らかのイベントを行うことで、リピーターを増やしている。

4. 試合中のパフォーマンスによる集客術

全てのインニング間で球団職員など、球場にいるスタッフがパフォーマンスを行うなどをして球場全体を盛り上げている。試合観戦に来たファンが試合の合間の時間も退屈することなく常に楽しめるようにするため、球場にいるすべての場所、時間を楽しめるよう努力している。

第5節 先行研究

これまでに、アメリカでのマイナー球団の設置が地域活性につながるといった研究(Arthur T. Johnson, 1993)や、MiLBの持続的経営に関する研究(石原, 2011)、北米野球のリロケート先としてのオーストラリアでのベースボールにみるグローバル化に関する研究(石原, 2012)、グローバル化する新興プロ野球(石原, 2013)、といった先進国へのプロ野球の普及に関する研究はあった。

しかし、アメリカMiLBが取り組んでいる内容が実際に日本の2軍において実行可能なのか、また試合開催時間やホームグラウンドといった動員数に関与すると思われる具体的な項目の違いについての研究はこれまでに十分な情報がない。

第6節 研究の目的

アメリカ、MiLBの発展とともにMiLBでの観客動員数獲得の成功要因を明らかにする。さらに日本の2軍の現状を分析し、アメリカMiLBでの取り組みが日本の下部組織である2軍において実行可能かを明らかにし、2軍球場の再立地に関して検証する。

第7節 研究の意義

アメリカ **MLB** の下部組織である **MiLB** の発展、さらには観客数の増員策を分析することとともに、日本の下部組織である **2軍** の現状と比較することで、今後の日本のスポーツの普及に大きく貢献できると考えられる。

第2章 研究方法

第1節 MiLB チームの本拠地に関する調査

第1項 対象

今回は2015年シーズンにおいて3Aに所属する30球団をMiLB球団として調査した。本拠地は公式HPによる本拠地球場を置く都市とした。またMiLB球団の対象となるMLB球団は以下のとおりである。

3Aとは主に東海岸の球団で構成された、インターナショナルリーグ14球団と、中地区から西海岸の球団で構成されたパシフィック・コーストリーグ16球団の2リーグである。

表1 インターナショナルリーグ

3A	3A 本拠地	MLB
インディアナポリス・インディアンズ	インディアナ州インディアナポリス	ピッツバーグ・パイレーツ
グウィネット・ブレーブス	ジョージア州ローレンスビル	アトランタ・ブレーブス
コロンバス・クリッパーズ	オハイオ州コロンバス	クリーブランド・ インディアンズ
シャーロット・ナイツ	ノースカロライナ州シャーロット	シカゴ・ホワイトソックス
シラキュース・チーフス	ニューヨーク州シラキュース	ワシントン・ナショナルズ
スクラントン・ウィルクスバリ・ レイルライダース	ペンシルベニア州ムジック	ニューヨーク・ヤンキース
ダーラム・ブルズ	ノースカロライナ州ダーラム	タンパベイ・レイズ
トレド・マッドヘンズ	オハイオ州トレド	デトロイト・タイガース
ノーフォーク・タイズ	バージニア州ノーフォーク	ボルチモア・オリオールズ
バッファロー・バイソンズ	ニューヨーク州バッファロー	トロント・ブルージェイズ
ポータケット・レッドソックス	ロードアイランド州ポータケット	ボストン・レッドソックス
リーハイバレー・アイアンピッグス	ペンシルベニア州アレンタウン	フィラデルフィア・ フィリーズ
ルイビル・バッツ	ケンタッキー州ルイビル	シンシナティ・レッズ
ロチェスター・レッドウイングス	ニューヨーク州ロチェスター	ミネソタ・ツインズ

表 2 パシフィック・コーストリーグ

3A	3A 本拠地	MLB
アイオワ・カブス	アイオワ州デモイン	シカゴ・カブス
アルバカーキ・アイソトープス	ニューメキシコ州アルバカーキ	コロラド・ロッキーズ
エル・パソ・チワワズ	テキサス州エル・パソ	サンディエゴ・パドレス
オクラホマシティ・ドジャース	オクラホマ州オクラホマシティ	ロサンゼルス・ドジャース
オマハ・ストームチェイサーズ	ネブラスカ州オマハ	カンザスシティ・ロイヤルズ
コロラドスプリングス・スカイソックス	コロラド州コロラドスプリングス	ミルウォーキー・ブルワーズ
サクラメント・リバーキャッツ	カリフォルニア州ヨロ郡 ウェストサクラメント	サンフランシスコ・ ジャイアンツ
ソルトレイク・ビーズ	ユタ州ソルトレイクシティ	ロサンゼルス・エンゼルス・ オブ・アナハイム
タコマ・レイニアーズ	ワシントン州タコマ	シアトル・マリナーズ
ナッシュビル・サウンズ	テネシー州ナッシュビル	オークランド・アスレチックス
ニューオーリンズ・ゼファーズ	ルイジアナ州ニューオーリンズ	マイアミ・マーリンズ
フレズノ・グリズリーズ	カリフォルニア州フレズノ郡フレズノ	ヒューストン・アストロズ
メンフィス・レッドバーズ	テネシー州メンフィス	セントルイス・カーディナルス
ラウンドロック・エクスプレス	テキサス州ラウンドロック	テキサス・レンジャーズ
ラスベガス・フィフティワウンズ	ネバダ州ラスベガス	ニューヨーク・メッツ
リノ・エーシズ	ネバダ州リノ	アリゾナ・ダイヤモンドバックス

第2項 調査項目

以下の項目について HP、文献等を用いて調査した。

- 1) 都市人口
- 2) MLB 本拠地との位置関係
- 3) スタジアム規模と稼働率
- 4) 試合日程
- 5) その他プロスポーツ

MiLB の本拠地球場のある都市人口、球場情報、試合日程並びに、MLB 球団との位置関係、その他プロスポーツチームとの関係性について調査した。

各チームのデータに関しては以下のサイトから収集した。

1. 都市人口

アメリカ合衆国国勢調査局の HP 内における各市の人口統計データより収集した。

2. MLB 本拠地との位置関係(本拠地、スタジアム)

MiLB の 3A に所属する各球団 HP 及び MLB の 30 球団の HP より収集した。

3. スタジアム情報 (収容人数、入場者数)

アメリカ、プロスポーツの本拠地情報及び球団 HP より収集した。

4. 試合日程

各球団 HP より収集した。

5. その他プロスポーツ

アメリカ 4 大スポーツである MLB、NFL、NBA、NHL 及び MLS (メジャーリーグサッカー) の情報に関しては ESPN によって収集した。

第2節 NPB2軍の本拠地に関する調査

第1項 対象

今回の分析は、2015年シーズンにおいて日本野球機構（NPB）に登録されている球団の2軍球団を対象にした。2軍本拠地は公式HPにおいて本拠地球場を置く都市とした。

2軍のリーグ別本拠地、ホームスタジアムは以下の通りである。

表3 イースタンリーグ

	2軍本拠地	ホームスタジアム
日本ハムファイターズ	鎌ヶ谷市	鎌ヶ谷球場
横浜 DeNA バイスターズ	横須賀市	横須賀スタジアム
読売ジャイアンツ	川崎市	ジャイアンツ球場
楽天イーグルス	宮城郡	利府球場
西武ライオンズ	所沢市	西武第二球場
千葉ロッテマリーンズ	さいたま市	ロッテ浦和球場
ヤクルトスワローズ	戸田市	戸田球場

表4 ウェスタンリーグ

	2軍本拠地	ホームスタジアム
中日ドラゴンズ	名古屋市	ナゴヤ球場
広島カープ	岩国市	由宇球場
阪神タイガース	西宮市	鳴尾浜球場
オリックスバファローズ	神戸市	あじさい球場
ソフトバンクホークス	福岡市	雁ノ巣球場

第2項 調査項目

以下の項目についてHP、文献等を用いて調査した。

- 1) 都市人口
- 2) 1軍本拠地との位置関係
- 3) スタジアム規模と稼働率
- 4) 試合日程
- 5) その他プロスポーツ

2軍の本拠地球場のある都市の人口、試合日程、2軍本拠地球場情報並びに、1軍本拠地との位置関係について調査した。

各チームのデータに関しては以下のサイトから収集した。なお、収集したデータに関しても以下に記載する。

1. 都市人口

総務省統計局の HP 内における各都市の人口統計データ³
国勢調査※平成 22 年度より収集した。

2. 1 軍本拠地との位置関係 (本拠地、スタジアム)

各球団 HP より収集した。また 2 軍本拠地スタジアムについては公式 HP に掲載されている球場を 2 軍本拠地とした。

3. スタジアム規模と稼働率

NPB 公式 HP より収集した。

4. 試合日程

各球団 HP より収集した。

5. その他プロスポーツ

J1,J2,J3 及び、bj リーグの情報に関しては各 HP より収集した。

第3節 NPB 現役プロ野球選手への意識調査

第1項 対象（2015年11月現在のNPB登録選手）

本調査では2015年11月時点の現役プロ野球選手を対象とした。セ・パ両リーグ合わせて100人の2軍経験のある現役選手を対象に質問用紙を配布し、アンケート調査を実施した。

- ・アンケート配布日時：11月23日～12月15日
- ・アンケート回収日時：11月23日～12月25日

調査用紙配布数：100

合計回収数：34（34%）

第2項 調査項目

本調査では、プロ野球2軍における1) 試合環境、2) 練習環境、3) ファンサービスに関する選手の意識を調査した。アンケートの詳細については以下に掲載する。

- ・アンケート項目に関しては以下とおりである。

表5 2軍環境に関するアンケート調査

A)2軍戦の試合日程は適切である
1) はい 2) いいえ
B)2軍戦の試合数は適切である
1) 多すぎる 2) 妥当である 3) 少なすぎる
C)デイゲームが続くことに負担を感じることもある
1) はい 2) いいえ
D)2軍戦のための自家用車での移動に負担を感じる
1) はい 2) いいえ
E)2軍戦のための道具の搬送はパフォーマンスに影響している
1) はい 2) いいえ
F)1軍チームの監督やコーチの2軍戦観戦はモチベーションの向上や強化に有効と考える
1) はい 2) いいえ 3) どちらでもない
G)1軍チームの監督やコーチの2軍戦観戦回数を増やして欲しい
1) はい 2) いいえ（現状で満足である）
H)1軍チームの監督やコーチから指導を受ける機会を設けて欲しい

1) はい	2) いいえ	
② 試合直前の写真会は負担である		
1) はい	2) いいえ	
③ グッズやサイン色紙の提供は負担である		
1) はい	2) いいえ	
P)2 軍戦の観客獲得イベントが企画されたらぜひ協力したい		
1) はい	2) どちらでもない	3) いいえ
<input type="checkbox"/> その企画の参加について当てはまるものを選んでください		
④ イベントへの参加について		
1) 報酬が出れば協力する	2) 報酬がなくても協力する	3) 報酬が出ても協力しない
⑤ グッズやサイン色紙の提供だったら協力する		
1) はい	2) いいえ	
Q) 2 軍試合環境や練習環境、ファン獲得等について意見や感想等をご自由にお書きください。		

第3項 分析方法、倫理的配慮

アンケート調査は匿名かつ、記入後に他人が操作できないよう本人にシール付きの封筒で封を閉じてもらった状態で回収した。得られたデータを統計的に処理して分析を行った。

第3章 研究結果

第1節 MiLB チームの本拠地に関する調査

第1項 都市人口

インターナショナルリーグ、パシフィック・コーストリーグにおける、各チームの本拠地の人口を調査した結果、以下のようになった。

表6より、インターナショナルリーグにおける人口の最大値はインディアナポリス・インディアンズの本拠地である、インディアナ州インディアナポリスの848,788人、最小値はスクラントン・ウィルクスバリ・レイルライダースの本拠地であるペンシルベニア州ムージックの5,681人であった。中央値は248,661人であった。

表7より、パシフィック・コーストリーグにおける人口の最大値はフレズノ・グリズリーズの本拠地である、カリフォルニア州フレズノ郡フレズノの965,974人、最小値はサクラメント・リバーキャッツの本拠地であるカリフォルニア州ヨロ郡ウェストサクラメントの51,847人であった。また、中央値は446,215人であった。

表6 インターナショナルリーグにおける本拠地と人口

チーム名	3A 本拠地	人口(人)
インディアナポリス・インディアンズ	インディアナ州 インディアナポリス	848,788
グウィネット・ブレーブス	ジョージア州ローレンスビル	30,212
コロンバス・クリッパーズ	オハイオ州コロンバス	835,957
シャーロット・ナイツ	ノースカロライナ州シャーロット	809,958
シラキュース・チーフス	ニューヨーク州シラキュース	144,263
スクラントン・ウィルクスバリ・レイルライダース	ペンシルベニア州ムージック	5,681
ダーラム・ブルズ	ノースカロライナ州ダーラム	251,893
トレド・マッドヘンズ	オハイオ州トレド	281,031
ノーフォーク・タイズ	バージニア州ノーフォーク	245,428
バッファロー・バイソンズ	ニューヨーク州バッファロー	258,703
ポータケット・レッドソックス	ロードアイランド州ポータケット	71,499
リーハイバレー・アイアンピッグス	ペンシルベニア州アレントアウン	119,104
ルイビル・パッツ	ケンタッキー州ルイビル	612,780
ロチェスター・レッドウイングス	ニューヨーク州ロチェスター	209,983

表 7 パシフィック・コーストリーグにおける本拠地と人口

チーム名	3A 本拠地	人口(人)
アイオワ・カブス	アイオワ州デモイン	209,220
アルバカーキ・アイソトープス	ニューメキシコ州アルバカーキ	557,169
エル・パソ・チワワズ	テキサス州エル・パソ	679,036
オクラホマシティ・ドジャース	オクラホマ州オクラホマシティ	620,602
オマハ・ストームチェイサーズ	ネブラスカ州オマハ	446,599
コロラドスプリングス・ スカイソックス	コロラド州エル・パソ郡 コロラドスプリングス	445,830
サクラメント・リバーキャッツ	カリフォルニア州ヨロ郡 ウェストサクラメント	51,847
ソルトレイク・ビーズ	ユタ州ソルトレイクシティ	190,884
タコマ・レイニアーズ	ワシントン州タコマ	205,159
ナッシュビル・サウンズ	テネシー州ナッシュビル	644,014
ニューオーリンズ・ゼファーズ	ルイジアナ州ニューオーリンズ	384,320
フレズノ・グリズリーズ	カリフォルニア州フレズノ郡 フレズノ	965,974
メンフィス・レッドバーズ	テネシー州メンフィス	656,861
ラウンドロック・エクスプレス	テキサス州ラウンドロック	112,744
ラスベガス・フィフティワウンズ	ネバダ州ラスベガス	613,599
リノ・エーシズ	ネバダ州リノ	236,995

第2項 MLB本拠地との立地関係

1) 本拠地都市間距離

インターナショナルリーグ、パシフィック・コーストリーグにおける、各チームのMLBチームとの距離および同一州にあるかを調査した結果、以下のようになった。

インターナショナルリーグにおいて、最もMLBチームとの距離が遠かったチームはロチェスター・レッドウイングスであり、ミネソタ州ミネアポリスにあるミネソタ・ツインズとの距離は1,264.26 kmであった。一方で、最もMLBチームとの距離が近かったチームはグウィネット・ブレーブスであり、ジョージア州アトランタにあるアトランタ・ブレーブスとの距離は43.34 kmであった。また、グウィネット・ブレーブス、コロンバス・クリッパーズ、リーハイバレー・アイアンピッグスの3チームがMLBチームと同一州に存在した。

またインターナショナルリーグにおけるMiLBとMLB本拠地との距離の中央値は184kmであった。

表8 インターナショナルリーグにおけるMLB本拠地との位置関係

チーム名	MLB本拠地	距離(km)	同一州
インディアナポリス・ インディアンズ	ペンシルベニア州ピッツバーグ	529.45	
グウィネット・ブレーブス	ジョージア州アトランタ	43.34	○
コロンバス・クリッパーズ	オハイオ州クリーブランド	203.52	○
シャーロット・ナイツ	イリノイ州シカゴ	945.72	
シラキュース・チーフス	ワシントンD.C.	466.12	
スクラントン・ウィルクスバリ・ レイルライダーズ	ニューヨーク州ニューヨーク ブロンクス	164.78	
ダーラム・ブルズ	フロリダ州 セントピーターズバーグ	981.45	
トレド・マッドヘンズ	ミシガン州デトロイト	85.49	
ノーフォーク・タイズ	メリーランド州ボルチモア	272.89	
バッファロー・バイソンズ	オンタリオ州トロント	94.21	
ボータケット・レッドソックス	マサチューセッツ州ボストン	59.78	
リーハイバレー・ アイアンピッグス	ペンシルベニア州 フィラデルフィア	77.83	○
ルイビル・バッツ	オハイオ州シンシナティ	144	
ロチェスター・レッドウイングス	ミネソタ州ミネアポリス	1,264.26	

パシフィック・コーストリーグにおいて最も MLB チームとの距離が遠かったチームはナッシュビル・サウンズであり、カリフォルニア州オークランドにあるオークランド・アスレチックスとの距離は 3,138.49 km であった。一方で、最も MLB チームとの距離が近かったチームはタコマ・レイニアーズであり、ワシントン州シアトルにあるシアトル・マリナーズとの距離は 40.52 km であった。また、サクラメント・リバーキャッツ、タコマ・レイニアーズ、ラウンドロック・エクスプレスの 3 チームが MLB チームと同一州に存在した。

またパシフィック・コーストリーグにおける MiLB と MLB 本拠地との距離の中央値は 951km であった。

表 9 パシフィック・コーストリーグにおける MLB 本拠地との位置関係

チーム名	MLB 本拠地	距離(km)	同一州
アイオワ・カブス	イリノイ州シカゴ	497.09	
アルバカーキ・アイソトープス	コロラド州デンバー	535.95	
エル・パソ・チワワズ	カリフォルニア州サンディエゴ	1,013.03	
オクラホマシティ・ドジャース	カリフォルニア州ロサンゼルス	1,897.33	
オマハ・ストームチェイサーズ	ミズーリ州カンザスシティ	268.22	
コロラドスプリングス・スカイソックス	ウィスコンシン州ミルウォーキー	1,492.41	
サクラメント・リバーキャッツ	カリフォルニア州サンフランシスコ	118.6	○
ソルトレイク・ビーズ	カリフォルニア州アナハイム	936.13	
タコマ・レイニアーズ	ワシントン州シアトル	40.52	○
ナッシュビル・サウンズ	カリフォルニア州オークランド	3,138.49	
ニューオーリンズ・ゼファーズ	フロリダ州マイアミ	1,076.53	
フレズノ・グリズリーズ	テキサス州ヒューストン	2,390.86	
メンフィス・レッドバーズ	ミズーリ州セントルイス	386.62	
ラウンドロック・エクスプレス	テキサス州アーリントン	253.51	○
ラスベガス・フィフティワイズ	ニューヨーク州ニューヨーク クイーンズ	3,602.5	
リノ・エーシズ	アリゾナ州フェニックス	966.05	

2) MLB および、MiLB 本拠地球場を置く州

MLB、30 球団の本拠地を置く州は全米 50 州中 18 州と、カナダのオンタリオ州にトロント・ブルージェイズの本拠地があった。

MiLB 球団の本拠地を置く州は全米で 21 州あった。また MLB、MiLB の両方がある州は 50 州のうち 8 州、どちらかの球団がある州は 32 州（オンタリオ州含む）であった。

表 10 MLB 及び、MiLB の本拠地球場を置く州

	MiLB	MLB		MiLB	MLB
アーカンソー州			ニューメキシコ州	1	
アイオワ州	1		ニューヨーク州	3	2
アラスカ州			ネバダ州	2	
アラバマ州			ネブラスカ州	1	
アリゾナ州		1	ノースカロライナ州	2	
イリノイ州		2	ノースダコタ州		
インディアナ州	1		バージニア州	1	
ウィスコンシン州		1	バーモント州		
ウェストバージニア州			ハワイ州		
オクラホマ州	1		フロリダ州		2
オハイオ州	2	2	ペンシルベニア州	2	2
オレゴン州			マサチューセッツ州		1
カリフォルニア州	2	5	ミシガン州		1
カンザス州			ミシシッピ州		
ケンタッキー州	1		ミズーリ州		2
コネチカット州			ミネソタ州		1
コロラド州	1	1	メイン州		
サウスカロライナ州			メリーランド州		1
サウスダコタ州			モンタナ州		
ジョージア州	1	1	ユタ州	1	
テキサス州	2	2	ルイジアナ州	1	
テネシー州	2		ロードアイランド州	1	
デラウェア州			ワイオミング州		
ニュージャージー州			ワシントン D.C		1
ニューハンプシャー州			ワシントン州	1	1
カナダ		1			

第3項 スタジアム規模と稼働率

1) スタジアム平均観客動員数と稼働率

インターナショナルリーグ、パシフィック・コーストリーグにおける各チーム本拠地球場の収容人数と稼働率を調査した結果、以下のようになった。

表 11 より、インターナショナルリーグにおける平均観客動員数、稼働率の最大値はシャーロット・ナイツの本拠地 BB&T Ballpark で 9,428 人、92.43 % であった。また最小値はシラキュース・チーフスの本拠地 NBT Bank Stadium で平均観客動員数が 3,803 人、稼働率が 34.35 % であった。またインターナショナルリーグにおける観客動員数の平均値は 7,130 人、稼働率の平均値が 62.13 %、であった。

インターナショナルリーグにおけるスタジアムの平均収容人数は 10,962 人であった。

表 11 インターナショナルリーグにおけるスタジアム平均観客動員数と稼働率

チーム名	スタジアム名	Capacity (人)	平均観客数 (人)	稼働率 (%)
シャーロット・ナイツ	BB&T Ballpark	10,200	9,428	92.43
コロンバス・クリッパーズ	Huntington Park	10,100	9,016	89.27
リーハイバレー・ アイアンピッグス	COCA-COLA PARK	10,178	8,769	86.16
ダーラム・ブルズ	Durham Bulls Athletic Park	10,000	7,814	78.14
トレド・マッドヘンズ	Fifth Third Field	10,300	7,699	74.75
インディアナポリス・ インディアンズ	Victory Field	14,230	9,331	65.57
スクラントン・ウィルクスバリ・ レイルライダーズ	PNC Field	10,000	5,753	57.53
ルイビル・バッツ	Louisville Slugger Field Facts	13,131	7,537	57.40
ポータケット・レッドソックス	McCoy Stadium	11,800	6,572	55.69
ノーフォーク・タイズ	Harbor Park	11,856	5,767	48.64
バッファロー・バイソンズ	Coca-Cola Field	17,600	8,228	46.75
ロチェスター・レッドウイングス	Frontier Field	13,500	6,291	46.60
グウィネット・ブレーブス	Coolray Field	10,427	3,808	36.52
シラキュース・チーフス	NBT Bank Stadium	11,071	3,803	34.35

表 12 より、パシフィック・コーストリーグにおける平均観客動員数の最大値はサクラメント・リバーキャッツの本拠地 Raley Field で 9,338 人、稼働率の最大値がエル・パソ・チワワズの本拠地 Southwest University Park で 85.83 % であった。また平均観客動員数の最小値はメンフィス・レッドバーズの本拠地 AutoZone Park で 4,037 人、稼働率の最小値がラスベガス・フィフティワイズの本拠地 Cashman Field で 38.67 % であった。またパシフィック・コーストリーグにおける観客動員数の平均値は 6,494 人、稼働率の平均値が 59.88 % であった。

パシフィック・コーストリーグにおけるスタジアムの平均収容人数は 11,649 人であった。

表 12 パシフィック・コーストリーグにおけるスタジアム平均観客動員数と稼働率

チーム名	スタジアム名	Capacity (人)	平均観客数 (人)	稼働率 (%)
エル・パソ・チワワズ	Southwest University Park	9,500	8,154	85.83
ナッシュビル・サウンズ	First Tennessee Park	10,000	7,965	79.65
オクラホマシティ・ ドジャース	Chickasaw Bricktown Ballpark	9,000	6,941	77.12
ラウンドロック・ エクスプレス	Dell Diamond	11,631	8,623	74.14
サクラメント・ リバーキャッツ	Raley Field	14,014	9,338	66.63
アイオワ・カブス	Principal Park	11,500	7,531	65.49
オマハ・ ストームチェイサーズ	Werner Park	9,023	5,516	61.13
アルバカーキ・ アイソトープス	Isotopes Park	13,279	8,007	60.30
リノ・エーシズ	Aces Ballpark	9,013	5,377	59.66
コロラドスプリングス・ スカイソックス	Security Service Field	8,500	4,619	54.34
タコマ・レイニアーズ	Cheney Stadium	9,600	4,965	51.72
フレズノ・グリズリーズ	Chukchansi Park	12,500	6,457	51.66
ニューオーリンズ・ ゼファーズ	Zephyr Field	10,000	4,710	47.10
ソルトレイク・ビーズ	Smith's Ballpark	15,411	6,823	44.27
メンフィス・レッドバーズ	AutoZone Park	10,000	4,037	40.37
ラスベガス・フィフティワイズ	Cashman Field	12,500	4,834	38.67

第4項 試合日程と観客動員数

2015年度のMiLB、3Aの30球団の本拠地使用率と試合開始時刻について調べた。MiLBでは本拠地球場の使用率が100%であった。MiLBでは年間通して本拠地球場のみで公式戦を開催していた。

試合開始時刻についてはam10:00~15:00の開催をデイゲーム。pm16:00~21:05の開催をナイターゲームとした。

- 1) インターナショナルリーグでは、全ての球団がデイゲームよりもナイターゲームの開催が多かった。14球団中11球団で、ナイターゲームの開催時に観客動員数が増えていた。

表 13 インターナショナルリーグにおける開始時間

	全日程			デイゲーム		ナイターゲーム	
	試合数	動員数 (人)	本拠地	試合数	動員数 (人)	試合数	動員数 (人)
シャーロット・ナイツ	69	9,422	100%	9	9,410	60	9,424
コロンバス・クリッパーズ	69	9,016	100%	12	8,431	57	9,139
リーハイバレー・ アイアンピッグス	69	8,749	100%	16	9,095	53	8,645
グウィネット・ブレーブス	71	3,808	100%	16	3,986	55	3,756
シラキュース・チーフス	68	3,832	100%	21	3,184	47	4,121
ダーラム・ブルズ	70	7,729	100%	9	7,382	61	7,781
トレド・マッドヘンズ	69	7,722	100%	8	7,195	60	7,792
インディアナポリス・ インディアンズ	70	9,293	100%	20	8,461	50	9,625
スクラントン・ウィルクスバ リ・レイルライダーズ	72	5,762	100%	16	5,441	53	5,858
ルイビル・バッツ	70	7,513	100%	7	7,950	63	7,464
ポータケット・ レッドソックス	71	6,653	100%	19	6,455	52	6,726
ノーフォーク・タイズ	67	5,767	100%	14	5,037	53	5,960
バッファロー・バイソンズ	66	8,279	100%	19	1,296	47	8,254
ロチェスター・ レッドウイングス	69	6,336	100%	22	5,982	47	8,254

2) パシフィック・コーストリーグも同様に、全ての球団がデイゲームよりもナイターゲームの開催が多かった。16球団中11球団で、ナイターゲームでの開催時に観客動員数が増えていた。

表 14 パシフィック・コーストリーグにおける開始時間

	全日程			デイゲーム		ナイターゲーム	
	試合数	動員数 (人)	本拠地	試合数	動員数 (人)	試合数	動員数 (人)
エル・パソ・チワワズ	71	8,154	100%	8	8,052	63	8,167
ナッシュビル・サウンズ	70	7,930	100%	5	6,799	65	8,017
ソルトレイク・ビーズ	68	6,774	100%	15	4,727	53	7,353
メンフィス・レッドバーズ	69	4,024	100%	11	4,017	58	4,026
ラスベガス・フィフティワウンズ	69	4,743	100%	12	3,461	57	5,018
オクラホマシティ・ドジャース	68	6,934	100%	9	7,012	59	6,922
ラウンドロック・エクスプレス	68	8,585	100%	4	8,987	64	8,562
サクラメント・リバーキャッツ	72	9,338	100%	14	9,985	58	9,182
アイオワ・カブス	65	7,482	100%	23	6,843	42	7,832
オマハ・ストームチェイサーズ	68	5,498	100%	15	5,259	53	5,566
アルバカーキ・アイソトープス	70	8,007	100%	8	6,897	62	8,151
リノ・エーシズ	68	5,316	100%	14	4,747	54	5,464
コロラドスプリングス・ スカイソックス	64	4,671	100%	14	4,743	50	4,651
タコマ・レイニアーズ	69	4,900	100%	13	5,418	56	4,780
フレズノ・グリズリーズ	71	6,418	100%	11	5,226	60	6,637
ニューオーリンズ・ゼファーズ	69	4,710	100%	11	4,673	58	4,717

第5項 その他プロスポーツとの関係

1) アメリカにおけるプロスポーツと都市の関係

アメリカの4大スポーツとMLS、MiLB(3A)の本拠地分布を以下の表15に表した。アメリカにおいてプロスポーツ球団の数が最も多かった州はカリフォルニア州の19チーム、次いでニューヨーク州の13チーム、テキサス州の12チームであった。またMLBではトロント・ブルージェイズのみカナダのオンタリオ州に本拠地があった。

全米50州の中で4大プロスポーツ及び、MiLBのある州は全部で34州あった。NHLはカナダのブリティッシュコロンビア州、マニトバ州、アルバータ州、ケベック州、オンタリオ州にも本拠地を置いていた。

2) 稼働率上位5チームの本拠地と4大スポーツの本拠地との距離

MiLBの本拠地稼働率上位5チームの概要を表16に示した。MiLBの本拠地稼働率上位5チームは、ノースカロライナ州のシャーロット・ナイツ、オハイオ州のコロンバス・クリッパーズ、ペンシルベニア州のリーハイバレー・アイアンピッグス、テキサス州のエル・パソ・チワワズ、テネシー州のナッシュビル・サウンズであった。

それぞれの州に存在するアメリカ4大スポーツとMLSのチーム数はノースカロライナ州が3、オハイオ州が7、ペンシルベニア州が8、テキサス州が10、テネシー州が3であった。

MiLBの5チームそれぞれとその他球団の本拠地間の平均距離は、シャーロット・ナイツが約159km、コロンバス・クリッパーズが約134km、リーハイバレー・アイアンピッグスが約243km、エル・パソ・チワワズが約973km、ナッシュビル・サウンズが約107kmであった。

表 15 その他スポーツとの関係

州	MiLB	MLB	NBA	NFL	NHL	MLS	合計
カリフォルニア州	2	5	4	3	3	2	19
ニューヨーク州	3	2	2	1	3	2	13
テキサス州	2	2	3	2	1	2	12
ペンシルベニア州	2	2	1	2	2	1	10
オハイオ州	2	2	1	2	1	1	9
コロラド州	1	1	1	1	1	1	6
テネシー州	2		1	1	1		5
ノースカロライナ州	2		1	1	1		5
ジョージア州	1	1	1	1			4
ワシントン州	1	1		1		1	4
インディアナ州	1		1	1			3
ユタ州	1		1			1	3
ルイジアナ州	1		1	1			3
オクラホマ州	1		1				2
ネバダ州	2						2
ロードアイランド州	1						1
アイオワ州	1						1
ケンタッキー州	1						1
ニューメキシコ州	1						1
ネブラスカ州	1						1
バージニア州	1						1
ニュージャージー州				2	1		3
アリゾナ州		1	1	1	1		4
イリノイ州		2	1	1	1	1	6
ウィスコンシン州		1	1	1			3
フロリダ州		2	2	3	2	1	10
マサチューセッツ州		1	1	1	1	1	5
ミシガン州		1	1	1	1		4
ミズーリ州		2		2	1		5
ワシントン D.C		1	1		1	1	4
カンザス州						1	1
メリーランド州		1		2			3
オレゴン州			1			1	2

ミネソタ州		1	1	1	1		4
ブリティッシュコロンビア州					1	1	2
マニトバ州					1		1
アルバータ州					2		2
ケベック州					1	1	2
オンタリオ州		1	1		2	1	5
	30	30	30	32	30	20	172

表 16 稼働率上位 5 チームの概要

球団名	州	都市	4 大リーグ+MLS	人口 (人)	本拠地平均距離 (km)	稼働率 (%)
シャーロットナイツ	ノースカロライナ州	シャーロット	3	809,958	159	92
コロムバスクリッパーズ	オハイオ州	コロムバス	7	835,957	134	89
アイアンピッグス	ペンシルベニア州	アレンタウン	8	119,104	243	86
エルパソチワワズ	テキサス州	エル・パソ	10	679,036	973	86
ナッシュビルサウンズ	テネシー州	ナッシュビル	3	644,014	106	80

第2節 NPB2軍の本拠地に関する調査

第1項 都市人口

2軍の本拠地の立地都市について調査した結果、最も人口の多い都市に本拠地を構えている球団は中日ドラゴンズで2,263,894人であった。一方最も人口の少ない都市に本拠地を置いている球団は楽天イーグルスで68,984人であった。

表 17 都市と人口

チーム名	2軍本拠地	人口(人)
日本ハムファイターズ	鎌ヶ谷市	107,853
横浜 DeNA ベイスターズ	横須賀市	418,325
読売ジャイアンツ	川崎市	1,425,512
楽天イーグルス	宮城郡	68,984
中日ドラゴンズ	名古屋市	2,263,894
広島カープ	岩国市	143,857
阪神タイガース	西宮市	482,640
オリックスバファローズ	神戸市	1,544,200
ソフトバンクホークス	福岡市	1,463,743
西武ライオンズ	所沢市	341,924
千葉ロッテマリーンズ	さいたま市	1,222,434
ヤクルトスワローズ	戸田市	123,079

第2項 1軍本拠地との立地関係

1) 1軍本拠地との都市間距離

2軍本拠地と1軍本拠地との距離及び、立地関係に関して調査した結果、以下のようになった。

1軍本拠地と最も遠かった球団は日本ハムファイターズで1,223kmであった。また、最も近い球団は西武ライオンズであった。西武ライオンズは1軍本拠地の敷地内に2軍球場を構えていた。1軍、2軍の本拠地間距離の中央値は25.7kmであった。

プロ野球12球団において同一県に2軍本拠地を設置している球団は6球団あった。

表 18 1軍、2軍 都市間距離

チーム名	人口(人)	距離(km)	同一県
日本ハムファイターズ	108,400	1,223	
横浜 DeNA ベイスターズ	406,708	23	○
読売ジャイアンツ	1,470,367	32	
楽天イーグルス	68,984	14	○
中日ドラゴンズ	2,280,415	11	○
広島カープ	136,475	70	
阪神タイガース	487,712	3.5	○
オリックスバファローズ	1,536,499	41	
ソフトバンクホークス	1,531,919	15	○
西武ライオンズ	342,763	0.5	○
千葉ロッテマリーンズ	1,257,262	64	
ヤクルトスワローズ	132,666	28.4	

2) 1軍及び、2軍の本拠地を置く都市

47 都道府県において1軍を置く県は11あった。また同一県に1軍の本拠地を置いていた都市と球団は東京都で、ヤクルトスワローズと読売ジャイアンツの2球団を設置していた。

また、2軍の本拠地球場を置く県は8あった。中でも埼玉県には西武ライオンズ、千葉ロッテマリーンズ、ヤクルトスワローズの3球団、神奈川県には横浜DeNAベイスターズ、読売ジャイアンツの2球団、兵庫県には阪神タイガースとオリックスバファローズの2球団の本拠地が設置されていた。

同一県に1軍、2軍の本拠地球場を置く球団は6球団で、楽天イーグルス、西武ライオンズ、横浜DeNAベイスターズ、中日ドラゴンズ、阪神タイガース、ソフトバンクホークスであった。

47 都道府県でプロ野球球団の本拠地のない県は35で、およそ4分の3の県にプロ野球の本拠地がなかった。

表 19 1軍及び2軍の本拠地

	1軍	2軍		1軍	2軍
北海道	○		三重		
青森			滋賀		
岩手			京都		
宮城	○	○	大阪	○	
秋田			兵庫	○	○
山形			奈良		
福島			和歌山		
新潟			鳥取		
茨城			島根		
栃木			岡山		
群馬			山口		○
埼玉	○	○	広島	○	
千葉	○	○	香川		
東京	○		高知		
神奈川	○	○	徳島		
富山			愛媛		
石川			福岡	○	○
福井			佐賀		
山梨			熊本		
長野			長崎		

岐阜			大分		
静岡			宮崎		
愛知	○	○	鹿児島		
			沖縄		

第3項 スタジアム規模と稼働率

2軍における各チームの本拠地スタジアムの規模と稼働率を調査した結果、以下のようになった。

12球団本拠地のスタジアム平均収容人数は2,775人であった。しかし西武ライオンズの本拠地の観客席は表記よりも少なく、あくまで最大収容力であった。

平均観客動員数の最大値は日本ハムファイターズで1,249人。最小値はヤクルトスワローズで252人であった。また稼働率はヤクルトと阪神が100%を超えていたものの、観客数では12球団中12位と7位であった。2軍の平均観客動員数は745人であった。

表 20 スタジアム規模と可動域

チーム名	スタジアム名	Capacity (人)	平均観客数 (人)	稼働率 (%)
日本ハムファイターズ	鎌ヶ谷球場	2,400	1,249	52.04
横浜 DeNA ベイスターズ	横須賀スタジアム	5,000	1,181	23.62
読売ジャイアンツ	ジャイアンツ球場	4,000	1,076	26.90
楽天イーグルス	利府球場	3,512	1,068	30.41
中日ドラゴンズ	ナゴヤ球場	4,523	1,037	22.93
広島カープ	由宇球場	3,500	995	28.43
阪神タイガース	鳴尾浜球場	500	521	104.20
オリックスバファローズ	あじさい球場	3,000	509	16.97
ソフトバンクホークス	雁ノ巣球場	3,470	458	13.20
西武ライオンズ	西武第二球場	3,000	321	10.70
千葉ロッテマリーンズ	ロッテ浦和球場	300	277	92.33
ヤクルトスワローズ	戸田球場	100	252	252.00

第4項 試合日程と観客動員数

2軍の本拠地球場のうち、ナイター設備がある球団は12球団中、横浜 DeNA ベイスターズの本拠地である横須賀スタジアム、読売ジャイアンツの本拠地であるジャイアンツ球場、楽天イーグルスの本拠地である利府球場の3つであった。そのため年間、110試合前後ある2軍の公式戦が、ナイター設備のない球場での開催であったため、多くの2軍戦がデイゲーム開催であった。

また、ホームゲーム（主催試合）を本拠地球場で行う割合を本拠地使用率としたところ、最も多く、本拠地球場で試合を開催していた球団が日本ハムファイターズで93%であった。横浜 DeNA ベイスターズ、楽天イーグルス、オリックスバッファローズの3球団はホームゲームの多くを地方球場で開催していた。

表 21 ナイター開催試合

チーム名	試合数	本拠地率 (%)	ナイターゲーム率	ナイター設備	観客動員数 (人)
日本ハムファイターズ	56	93	-		1,249
横浜 DeNA ベイスターズ	54	46	43%	○	1,181
読売ジャイアンツ	58	86	0	○	1,076
楽天イーグルス	56	41	-	○	1,068
中日ドラゴンズ	50	78	-		1,037
広島カープ	53	85	-		995
阪神タイガース	57	74	2%		521
オリックスバッファローズ	56	48	2%		509
ソフトバンクホークス	55	73	-		458
西武ライオンズ	53	77	-		321
千葉ロッテマリーンズ	52	87	2%		277
ヤクルトスワローズ	54	89	-		252

第5項 親子球場開催に関して

年に数回ではあるが、12球団中11球団で1軍の本拠地球場を利用した2軍戦が開催されていた。また、1軍の本拠地球場で昼間に2軍戦を行い、夜に1軍戦を行う親子ゲームと呼ばれる試合も開催されていた。親球場での2軍戦開催時における12球団の観客動員数の平均は2,161人であった。

表 22 1軍本拠地での開催

チーム名	親球場開催数	親球場動員数 (人)	本拠地開催数	本拠地動員数 (人)
日本ハムファイターズ	0	-	52	1,249
横浜 DeNA ベイスターズ	2	1,627	25	1,181
読売ジャイアンツ	2	16,013	50	1,076
楽天イーグルス	17	1,230	23	1,068
中日ドラゴンズ	2	1,567	39	1,037
広島カープ	4	5,099	45	995
阪神タイガース	9	1,419	42	521
オリックスバファローズ	1	506	27	509
ソフトバンクホークス	8	1,189	40	458
西武ライオンズ	2	2,703	41	321
千葉ロッテマリーンズ	2	847	45	277
ヤクルトスワローズ	3	920	50	252

第6項 2軍戦 地方開催

プロ野球2軍の12球団すべての球団が地方球場での試合を開催していた。2軍では本拠地開催に比べて地方開催試合において観客動員数が伸びていることが明らかになった。

2015年は年間174試合を70の地方球場にて開催していた。地方球場での2軍戦開催時における12球団の観客動員数の平均は2,067人であった。

表 23 2軍地方球場での開催

チーム名	地方球場 開催数	動員数 (人)	本拠地 開催数	動員数 (人)
読売ジャイアンツ	8	2,830	50	1,076
横浜 DeNA ベイスターズ	29	943	25	1,181
ヤクルトスワローズ	4	438	50	252
広島カープ	7	4,450	45	995
阪神タイガース	15	1,826	42	521
中日ドラゴンズ	11	2,648	39	1,037
ソフトバンクホークス	15	3,462	40	458
日本ハムファイターズ	4	4,177	52	1,249
西武ライオンズ	12	2,519	41	321
楽天イーグルス	33	1,812	23	1,068
千葉ロッテマリーンズ	7	1,636	45	277
オリックスバファローズ	29	1,727	27	509

2軍戦の地方試合の際に使用された球場及び、行った都道府県、観客動員数は以下の通りである。2015年度の2軍公式戦は地方試合を含めると32の都道府県で開催されていた。

表 24 2015 年度 2 軍公式戦の開催球場

	球場	開催数	動員数 (人)		球場	開催数	動員数 (人)
愛知	蒲郡	1	3,750	静岡	島田	1	1,681
	豊橋	1	3,712		掛川	1	1,812
青森	弘前	1	3,541	島根	石見	1	2,300
	八戸	1	3,295	千葉	船橋	2	1,642
秋田	大館市田代	1	2,263		成田	1	1,725
	大仙市大曲	1	1,472		袖ヶ浦	1	1,500
石川	金沢	1	2,055		柏の里	1	3,250
茨城	いわき	1	4,521	富山	高岡	1	1,285
	ひたちなか	1	2,383	奈良	佐藤スタ	2	3,318
大分	中津	1	2,400	新潟	新発田	1	2,808
大阪	東大阪	2	2,259		南魚沼	1	1,412
	豊中ローズ	2	1,658		新潟三条	1	1,465
	舞洲	1	588	兵庫	淡路	2	1,835
	高槻萩谷	2	1,399		北神戸	12	322
	富田林 BS	2	1,363		ほっと神戸	1	854
香川	丸亀	2	1,998	広島	三原	1	5,100
神奈川	平塚	15	965		豊平	1	3,800
	ベイスターズ	7	348	福岡	久留米	1	2,817
	相模原	2	1,244		小郡	1	4,233
	小田原	1	2,846		北九州	1	4,140
	福島	海老名	1	1,369	会津若松	1	2,020
		大和	1	1,847	南相馬	1	1,828
岐阜	可児	1	3,077		花巻	1	3,289
京都	丹波	1	1,300	北海道	稚内	1	3,549
熊本	八代	1	6,350		釧路	1	4,612
群馬	桐生	1	3,513		札幌丸山	1	6,285
	高崎	1	4,935		別海町	1	2,260
高知	高知	2	1,358	三重	四日市	1	2,011
埼玉	飯能	1	990	宮城	利府	1	438
	熊谷	1	1,060		石巻	1	1,708
	本庄	1	3,737	山形	天童	3	785
	上尾	1	2,640		山形	4	1,045

	市営浦和	1	1,206		米沢	1	3,044
	熊谷	1	2,343	山口	下関	1	2,258
	越谷	1	4,237		宇部	1	2,038
				和歌山	紀三井寺	1	2,192

第7項 1軍戦 地方開催

2015年シーズンの1軍の地方球場での開催は72試合、28球場で開催されており、球場の収容力、稼働率、観客動員数は以下の通りである。地方球場での1軍戦開催時における12球団の観客動員数の平均は17,041人であった。また地方球場開催時の平均稼働率は72%であった。

表 25 2015年度1軍公式戦の開催球場

チーム名	動員数 (人)	球場	収容力 (人)	稼働率	チーム名	動員数 (人)	球場	収容力 (人)	稼働率
横浜	22,782	新潟	30,000	76%	ヤクルト	17,328	松山	30,000	58%
横浜	11,525	那覇	30,000	38%	ヤクルト	6,488	秋田	25,000	26%
阪神	30,068	倉敷	30,494	99%	ヤクルト	20,526	静岡	21,656	95%
巨人	15,827	前橋	20,934	76%	ヤクルト	12,361	福島	30,000	41%
巨人	18,126	宇都宮	30,000	60%	ソフトバンク	19,079	鹿児島	21,000	91%
巨人	13,186	郡山	18,200	72%	ソフトバンク	15,088	熊本	24,000	63%
巨人	22,516	松山	30,000	75%	ソフトバンク	17,855	北九州	18,760	95%
巨人	10,401	金沢	17,126	61%	オリックス	26,261	ほっと神戸	35,000	75%
広島	13,558	尾道	16,000	85%	オリックス	14,008	京都	20,000	70%
広島	21,126	長野	30,000	70%	日本ハム	21,808	旭川	25,000	87%
広島	20,006	富山	30,003	67%	日本ハム	14,518	帯広	23,008	63%
広島	13,625	三次	16,000	85%	楽天	13,574	郡山	18,200	75%
中日	18,323	浜松	26,000	70%	楽天	18,220	山形	21,292	86%
中日	10,756	豊橋	15,895	68%	楽天	19,459	秋田	25,000	78%
中日	17,426	岐阜	22,030	79%	楽天	15,498	盛岡	25,000	62%
					西武	16,936	大宮	20,500	83%

第8項 その他プロスポーツとの関係

2015年現在で、プロ野球1軍、2軍、Jリーグ(J1、J2、J3)、bjリーグを置く県について調査した結果は以下の通りになった。

プロ野球球団が1軍2軍、合わせて24球団、JリーグがJ1、J2、J3合わせて52球団、

bj リーグが 22 球団であった。全ての競技のプロスポーツ球団のない県は福井県、三重県、高知県、和歌山県、宮崎県、鹿児島県の 6 つの県であった。

表 26 日本におけるプロスポーツ

	1 軍	2 軍	J1	J2	J3	bj		1 軍	2 軍	J1	J2	J3	bj
北海道	1			1			三重						
青森						1	滋賀						1
岩手					1	1	京都				1		1
宮城	1	1	1			1	大阪	1		1	1		1
秋田					1	1	兵庫	1	2	1			
山形			1				奈良						1
福島					1	1	和歌山						
新潟			1			1	鳥取					1	
茨城			1	1			島根						1
栃木				1			岡山				1		
群馬				1		1	山口		1			1	
埼玉	1	3	1			1	広島	1		1			
千葉	1	1	1	1			香川				1		1
東京	2		1	1	1	1	高知						
神奈川	1	2	3	1	2	1	徳島				1		
富山					1	1	愛媛				1		
石川				1			福岡	1	1		2		1
福井							佐賀			1			
山梨			1				熊本				1		
長野			1		1	1	長崎				1		
岐阜				1			大分				1		1
静岡			1	1	1	1	宮崎						
愛知	1	1	1				鹿児島						
							沖縄					1	1

第3節 現役プロ野球選手へのアンケートによる意識調査

第1項 試合環境(観客数、試合数、移動)

試合環境に関するアンケート調査の結果、試合日程に関しては丁度良いと考える選手が多かった。また試合数に関しても現状で満足しているという声が多かった。試合を行う際の交通手段、道具の運搬に関しても試合に負担のかかるものでは無いという声が多かった。

自身が出場する試合に関して、スタジアムに観客が多く来てくれることが自身のモチベーションアップにつながると感じている選手が多く、2軍戦でも観客のいる中でプレーをしたいと望んでいた。

第2項 練習環境(立地条件、指導)

練習環境に関するアンケート調査の結果、練習時間に問題はないという意見が多かった。また2軍にいる際に、1軍の指導者に自身のプレーを見に来てもらいたいという声もあった。1軍の指導者と2軍の指導者で指導内容に関して戸惑うことがあるという意見も多く、一貫した指導のためにも1軍指導者の2軍選手の現状の把握は必要であると考えられる。

第3項 2軍におけるファン獲得(イベントへの参加意思の有無、必要性)

プロ野球2軍におけるファン獲得イベントについてのアンケート調査の結果、現在行っているファンイベントに関して負担、不満に思っている選手は少なく、球団イベントには積極的に参加しても良いという声が多かった。報酬の有無に関わらず球団のファン獲得イベントに参加しても良いという選手も多くいた。

表 27 2軍環境に関するアンケート調査の結果

A)2軍戦の試合日程は適切である
1) はい : 27人 2) いいえ : 4人
B)2軍戦の試合数は適切である
1) 多すぎる : 1人 2) 妥当である : 21人 3) 少なすぎる : 9人
C)デイゲームが続くことに負担を感じることもある
1) はい : 15人 2) いいえ : 15人
D)2軍戦のための自家用車での移動に負担を感じる
1) はい : 13人 2) いいえ : 17人
E)2軍戦のための道具の搬送はパフォーマンスに影響している
1) はい : 7人 2) いいえ : 24人
F)1軍チームの監督やコーチの2軍戦観戦はモチベーションの向上や強化に有効と考える

1) はい： 23人 2) いいえ： 3人 3) どちらでもない： 6人
G)1 軍チームの監督やコーチの2軍戦観戦回数を増やして欲しい
1) はい： 13人 2) いいえ (現状で満足である)： 18人
H)1 軍チームの監督やコーチから指導を受ける機会を設けて欲しい
1) はい： 17人 2) いいえ： 12人
D)1 軍指導者と2軍指導者との指導の違いで戸惑うことがある (一貫していないと感じることがある) 1) はい： 17人 2) いいえ： 14人
J)2 軍の練習に満足している
1) はい： 22人 2) いいえ： 9人
<input type="checkbox"/> 「いいえ」と答えた理由にあてはまるものを選んで下さい(複数選択可)
① 全体練習ための拘束時間が長い： 4人
② 一軍指導者と異なる指導がされるから： 3人
③ 個別練習の時間が短い： 0人
④ 練習スペースが狭い： 0人
⑤ トレーニング機材の数が少ない： 2人
⑥ トレーニング機材の種類が少ない： 1人
⑦ その他 (理由を書いてください：)
K)現在、2軍所属選手数が約 50人 となっています。これを踏まえた上で下記質問にあてはまるものを選んでください。(1球団あたりの支配下選手、育成選手を合わせて 70人 強と考えて)
① 一人当たりの試合出場機会や練習時間が減っても2軍所属選手を 75人 に増やすべきである： 1人
② 一人当たりの試合出場機会や練習時間が減っても2軍所属選手を 67人 に増やすべきである： 2人
③ 現状の試合数、練習時間、内容と支配下人数は適切である： 22人
④ 一人当たりの試合出場機会や練習時間の充実のために、2軍所属選手を 37人 にすべきである。： 3人
⑤ 一人当たりの試合出場機会や練習時間の充実のために、2軍所属選手を 25人 にすべきである。： 1人
L)現在の2軍の試合における観客数に満足している
1) はい： 13人 2) いいえ： 18人
M)観客が多い方がモチベーションが上がる
1) はい： 29人 2) いいえ： 3人

N)2 軍戦の観客動員のために球団は努力をしていると思う
1) はい： 22人 2) いいえ： 8人
O)現在実施されている試合直前のイベントについて当てはまるものを選んでください
① 試合直前に野球教室実施することは選手に負担である
1) はい： 16人 2) いいえ： 15人
② 試合直前の写真会は負担である
1) はい： 14人 2) いいえ： 17人
③ グッズやサイン色紙の提供は負担である
1) はい： 7人 2) いいえ： 25人
P)2 軍戦の観客獲得イベントが企画されたらぜひ協力したい
1) はい： 19人 2) どちらでもない： 12人 3) いいえ： 1人
<input type="checkbox"/> その企画の参加について当てはまるものを選んでください
④ イベントへの参加について
1) 報酬が出れば協力する： 12人 2) 報酬がなくても協力する： 17人 3) 報酬が出ても協力しない： 1人
⑤ グッズやサイン色紙の提供だったら協力する
1) はい： 12人 2) いいえ： 18人
Q) 2軍試合環境や練習環境、ファン獲得等について意見や感想等をご自由にお書きください。

第4章 考察

第1節 MiLBの成功要因

第1項 立地条件からみる成功要因

アメリカではMLBとその傘下であるMiLB球団の本拠地が同一州にあるのは30球団中6球団のみであった。MLBを置く都市の平均人口は1,467,651人と、多くの球団が大都市に設置されていた。一方、MiLB球団を置く都市の平均人口は391,538人であった。中には5,681人といった小さな町に本拠地を置く球団もあり、MiLBは比較的人口の少ない都市にも設置されていた。

また傘下ではないMiLBとMLBの本拠地球場が同一州にあることも多く、アメリカではMLBの傘下球団を近くに置くという傾向はなかった。また今回、同一州に傘下球団があるかを調査したが、アメリカでは州が大きいいため同一州ではあるものの1000km近く離れていることもあった。

MiLBは全米50州のうち21州に渡って本拠地を置いており、そのうち16球団はMLB球団がない州に、その中でも8球団は4大スポーツもない州に設置されていた。

MiLB球団が野球のなかった州に新たに設置しても多くの観客数を獲得できたということは、石原ら(2013)による野球不毛の地であるイタリアでもプロ野球産業が発展するといった研究の示す通りであった。

このようにアメリカではMiLB球団をMLBの傘下球団の近くや、人口の多い大都市に設置するという概念はなく、むしろ全米に広がるようMLB球団がない州に置く傾向があると考えられる。そのためMiLBはアメリカにおいて野球の普及の役割を果たしていたと考えられる。

松村ら(2012)のスマールリーグ観戦者の観戦要因についての研究では、観戦者は特定の選手を観に行くというよりも、野球というスポーツを楽しむために観戦に来ているとあった。そのため元MiLB球団職員へのインタビュー調査結果の示すように、新たな土地でも企業努力によって観客数を獲得できるという内容が確認された。

またアメリカ国内では4大スポーツと呼ばれるMLB、NFL、NBA、NHLが人気であり、4大スポーツと、MiLB、メジャーリーグ・サッカー(MLS)を合わせると全米50州に172球団あり34州に分布されていた。多くの州に野球以外のプロスポーツ球団の本拠地があり、もっともプロスポーツ球団を置く州はカリフォルニア州で、MiLBが2球団、それ以外にもMLBが5球団、NBAが4球団、NFLが3球団、NHLが3球団、MLSが2球団と合わせて19ものプロスポーツ球団があった。

MLBをはじめ、4大スポーツの特徴は大都市に設置することが多かったが、MiLBの特徴としては4大スポーツの本拠地の少ない州に置く傾向があった。MiLBでは大都市に本拠地を置いて観客数を獲得するというよりも、競争相手の少ない州に置き、自らの球団努力によって新たな観客を獲得していたと考えられる。

MiLBの中でも特に観客動員数の多かった球団を調査すると、インターナショナルリーグ

の稼働率上位 5 球団中、2 球団がノースカロライナ州を本拠地とする、シャーロット・ナイツと、ダーラム・ブルズであった。ノースカロライナ州には 4 大スポーツのうち NFL、NHL、NBA の本拠地はあるものの MLB 球団はなく、ノースカロライナ州において野球は MiLB が最もレベルが高かった。そのため MLB 球団が無い州の方が MiLB の試合において高い稼働率を獲得出来たということが考えられる。

また、ノースカロライナ州には野球以外のプロスポーツの本拠地があったことから、近くに MLB がないものの、他の競技のプロスポーツ球団がある都市は、地元の球団を応援するといった意識があり、球場に観戦に行くという習慣が出来ていたため、稼働率が高くなっていたのではないかと考えられる。

一方、稼働率が悪かった球団はニューヨーク州に本拠地を置く球団であった。ニューヨーク州を本拠地とする MiLB 球団は 3 球団あったが、3 球団とも稼働率は 50%以下と低い値であった。ニューヨーク州にはニューヨーク・ヤンキースや、ニューヨーク・メッツといった MLB の球団があったことと、さらに MiLB 球団が置かれていた都市の人口が少なく、周りに他のプロスポーツ球団も無かったことが影響していたと考えられる。

立地条件からみる集客の成功要因としては、MiLB の本拠地は MLB の近くに置かず、あえて全米中の都市に点在させ、MLB とは異なる観客を獲得していたこと、他のプロスポーツの本拠地が近くにありスポーツ観戦の習慣のある都市に設置していたことの 2 点が挙げられる。

第 2 項 試合日程とスタジアム規模からみる成功要因

MiLB の試合日程はナイターゲーム開催が多いことが挙げられる。特に平日の試合開始時間を調査したところ、全 30 球団でナイターゲームが多く、30 球団中 22 球団で年間平均観客動員数、稼働率ともにナイターゲーム時に多くなっていた。そのためナイターゲームは MiLB 全日程のうち 79%を占めていた。ナイターゲームの利点は平日の日中に働く人たちが、仕事後に観戦に訪れることができるところにある。そのため MiLB の試合日程は観る人に合わせて設定されていたと言える。

通常ナイターゲーム開催ではデイゲームとは違い照明代等のコストがかかるが、MiLB ではデイゲーム開催よりも観客数が増えるナイターゲームの試合数を増やし多くの観戦客を獲得することを優先させていた。

また、本拠地球場は全 30 球団で 10,000 人を収容可能な巨大な球場を持っていた。このような巨大なスタジアムに多くの観客が集まることでより試合が盛り上がり、訪れてきた観戦客を魅了させる雰囲気を作り出す効果もあったと考えられる。

MiLB の試合日程スタジアム規模からみた集客の成功要因として、人々が来やすい時間帯に試合を開催していること、10,000 人規模の大きな球場を持っていたこと、以上の 2 点が挙げられる。

第2節 日本との比較

第1項 立地条件

1) NPB1軍との関係

日本では12球団中6球団が同一県に2軍の本拠地を置いていた。特に関東では埼玉、東京、神奈川、千葉に1軍2軍合わせると11球団の本拠地が置かれていた。

関東では他の球団の1軍と同じ県に異なる球団の2軍を置くこともあり、狭い範囲に多くの球団が存在していた。1軍2軍の本拠地間距離は日本ハムファイターズの札幌―千葉を除くと平均27kmと、アメリカとは異なり1軍本拠地の近いところに下部組織である2軍を設置する傾向があった。

関東に2軍本拠地を置く球団の都市人口の平均は62万人と比較的大都市に置かれているが、最も離れている横浜DeNAベイスターズの2軍本拠地がある横須賀市と、西武ライオンズの2軍の本拠地がある所沢市の間で62kmしか離れていなかった。つまり、この直径62kmの中に11球団の本拠地があることになる。この距離はアメリカで最も近距離に設置されていた、MLB球団アトランタ・ブレーブスと、その傘下球団であるグウィネット・ブレーブスの本拠地間の距離が40kmであることを考えると日本の球団がいかに密集しているかがわかる。

関東に2軍の本拠地を置く球団の観客動員数を見てみると日本ハムファイターズが1,249人と、2軍の中では最も多い動員数で、稼働率は52%であった。次いで観客数の多い球団が横浜DeNAベイスターズの1,181人、読売ジャイアンツの1,076人であったがどちらも稼働率が20%台と低調であった。また、西武ライオンズ、千葉ロッテ、ヤクルトスワローズの平均観客動員数は500人を切っていた。

日本NPB1軍との関係をみると、2軍の本拠地が大都市ではあるものの1軍本拠地の近くに設置されているため、多くのファンが2軍戦ではなく1軍戦を観に行ってしまうと考えられる。アメリカMiLBが日本の2軍よりも少ない都市人口にも関わらず、多くの観客動員数を獲得していることを考えると2軍の本拠地は1軍本拠地から離すことが必要であると考えられる。

2) 独立リーグの存在

日本では2005年、四国に日本で初めての独立リーグ、四国アイランドリーグが誕生した。その後2007年には北信越を中心としたベースボール・チャレンジリーグ(BCリーグ)が誕生し、2015年現在の日本の独立リーグは12県、12球団まで増えた。

独立リーグはプロ野球選手を輩出するために選手の育成を行っているとともに、球団運営も各球団が独立採算制をとり、さまざまな経営努力を行っている。特に独立リーグは放映権収入がないため入場料収入が大きな収入源となっており、様々なイベントを開催して

観客動員数を増やすなど MiLB と同じようなリーグの構造である。

これまでの日本の 2 軍は選手の育成のみを目的としており、1 軍本拠地の近くに置き、観客を集めるといった目的がなく小さな球場かつ、観客が来ることの出来ないような時間帯での開催が多かった。しかし、今回行った現役選手へのアンケート調査からも、選手にとって観客数の多い中でプレーすることが競技力の向上につながるという考えがあることも分かった。これまでの 2 軍のような下部組織ではなく、大きなスタジアムで、多くの観客の中での試合を経験させることが育成という面でも良いと思われる。そのため今後は NPB も 2 軍戦の観客数の増加を考えるべきであるといえる。

しかし、独立リーグの観客動員数は 2 軍戦よりも少ないのが現状である。この原因の一つとして独立リーグが行われている 12 球団のうち 10 球団がプロ野球の公式戦が行われている県に設置されていることが影響していると考えられる。アメリカでは同一州に MLB 球団の本拠地があることが MiLB の観客動員数に影響が出ていたように、独立リーグの本拠地を置く県でプロ野球の公式戦が行われることは独立リーグの集客に大きく影響していると考えられる。

独立リーグが MiLB のような球団努力を行い普及し始めているため、この先の日本の野球界の発展を考える上では、現在のように定期的に地方球場でプロ野球の公式戦を開催するよりも、地方に根付いた球団を備えることの方が、選手の育成、野球の普及の面でより良い影響が起これると考えられる。

第 2 項 試合日程とスタジアム規模

日本では 2 軍戦は 1 軍戦に比べると観客動員数が極端に低少なくなっている。その原因の一つが試合開始時間であると考えられる。現在、2 軍の本拠地球場にナイター設備が備わっている球団は 3 球団しかなく、多くの球団が試合開始時間を昼間にせざるを得ない状況である。そのため仕事のある人が観戦に来ることが出来ない日程となっている。

また、スタジアムの大きさも最も大きい球場を持つ球団が横浜 DeNA ベイスターズで、本拠地として使用している横須賀スタジアムの収容人数は 5,000 人であった。中にはヤクルトスワローズ、千葉ロッテマリーンズ、阪神タイガースの本拠地球場のように収容人数が 100 人、300 人、500 人と地方球場よりも小さい球場を使用している球団もあった。

これは MiLB のような球場の盛り上がり起きず、ファンが球場へ観戦するに至らないと考えられる。日本のプロ野球の多くの球団は 1 軍と 2 軍しかないため、1 軍経験のある選手も 2 軍の試合に出場しており、2 軍戦でもレベルの高いプレーや認知度の高い選手を見ることが出来る。これまで日本の 2 軍では MiLB の集客の成功要因にみられるような取り組みが行われていない球団が多いため、これから 2 軍戦を充実させることによってさらなる、観客増が見込まれるといえる。

第3節 日本の2軍の再立地の可能性

日本では公式戦を地方球場で行うことがあり、地方球場の方が収容力、ナイター設備といった面で優れている球場が多いことが明らかになった。

今シーズンの地方球場での2軍戦は70の球場で174試合開催されており、平均観客動員数は2,067人であった。また1軍も同様に28の球場で年間72試合開催されており、平均観客動員数が17,041人と、地方球場にも関わらず多くの観客動員数をあげていた。日本ではプロ野球球団を設置している県が少なく、これまで地方巡業として定期的に地方開催を行うことによって野球の普及を行っていたと考えられる。

そこで今回のMiLBの立地傾向及び、稼働率の特徴から日本の2軍の再立地先として2015年シーズンにNPB1軍の公式戦が開催された地方球場の中に最も良い都市及び、球場があると考えた。

2015年のNPB1軍の公式戦で使用された地方球場は全部で92球場あり、その中で1軍、2軍の本拠地のない県の球場は57球場あった。その中でもbjリーグとJリーグ(J1、J2、J3)といった国内のプロスポーツ球団の本拠地が設置されている県は22あった。

2015年シーズンにNPB1軍の公式戦を行った地方球場で、稼働率がMiLB全体の平均稼働率である60%を超えた球場のある都市は、新潟、山形、秋田、盛岡、前橋、宇都宮、郡山、金沢、富山、長野、静岡、浜松、豊橋、岐阜、京都、倉敷、松山、熊本の18の都市であった。

上記の都市にある球場は全て、10,000人を超える収容力があり、ナイター設備がついていた。そのため今後2軍の本拠地として今よりも多くの観客を集客する可能性がある球場であるといえる。

また、アンケート調査の結果から、選手は現在の移動に関して特に負担に感じておらず今後、東北に2軍を置く球団が新潟、山形、秋田、盛岡、郡山に移転することや、関東の球団が、金沢、前橋、宇都宮、長野、静岡、浜松、豊橋、岐阜といった都市に移転すること、関西の球団が、京都、倉敷、松山への移転、九州の球団が熊本に移転しても選手が移動面において負担と感ずることはないと考えられる。

一方、これら候補地には既に独立リーグ等の球団が設置されている都市が多いことが懸念される。日本には学生野球以降にも実業団野球(社会人野球)、クラブチーム、独立リーグなどさまざまな野球のリーグが存在する。しかし、これらリーグなくしてプロ野球の発展は考えられない。今後はそれぞれのリーグの存続とプロ野球のさらなる発展を同時に考慮に入れる必要がある。

MLBの下部組織であるMiLBのような球団にNPBの2軍になることは可能であると考えられる。しかし、そのために出来ることを日本ではまだ行っていないといえる。今後2軍の再立地、増員策を行うことによってプロ野球の下部組織の充実、さらには日本の野球界の発展に寄与することが出来る考える。

第5章 結論

今回の研究によって、MiLBにはMLBのない州への設置傾向、観客が観戦可能な時間帯での試合開催、十分な観客収容力と設備の充実、があることが確認された。さらに、その他プロスポーツとの相互作用もうまく機能して多くの観客数を獲得できる環境を得ていることが明らかになった。

現在の日本でもアメリカ MiLB のような条件での本拠地設置は実行可能な要素も多くある。

2 軍本拠地の再立地によってこれまでプロ野球を実際に観戦することが出来なかった人々が観戦に訪れることができ、野球人気再生の可能性が充分あると考える。

2 軍の改革を通して、その存在意義を高め、多くの人にプロ野球の魅力を実感してもらうことによって、野球界のさらなる発展につながると考える。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、多くの方々のご協力やお力添えがなければ完成には至りませんでした。ご指導、ご協力頂いた全ての方に感謝を申し上げます。

指導教員である平田竹男教授には、本稿に対するご指導はもちろんのこと、スポーツビジネスの考え方や、勉強に対する姿勢など大変熱心にご指導頂きました。平田教授にご指導頂いたことは非常に誇りであるとともに、この1年は私の人生の中で最も充実した、また成長した時間でした。

同様に、本研究に重要な示唆を与えて頂いた副査の中村好男教授、論文作成に関する丁寧で細かな指導をして頂いた児玉有子先生をはじめ、早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導を頂いた教授および講師の皆様がこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

アンケートやインタビューにご協力頂いた方々、またそのアポイントなどにご尽力頂いた、NPB12球団の関係者各位、現役選手の皆様がこの場を借りて感謝申し上げます。

さらに、平田研究室同期の10期生の皆様にも、多くのご指導を頂き、本稿を完成させることが出来ました。皆様のご助力に心より感謝申し上げます。

修士2年製の奥下諒氏、藤井暢之氏、松本尚己氏にも、様々な面から支援を頂きました。多くの協力と、論文完成までのサポートとたくさんの刺激を頂いた点において、改めて感謝の意を表したいと思います。

最後に、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いたすべての皆様へ、感謝の意をもって謝辞とさせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 石原 豊一 (2013) グローバル化する新興プロ野球
-「野球不毛の大陸」への橋頭保としてのイタリアプロ野球-Globalization of New Professional Baseball : Italian Professional Baseball as a Bridge to the "Baseball Barren Continent"
 - 2) 松村 浩貴 土肥 隆 (2011) スモールリーグ観戦者における観戦要因について
 - 3) 石原 豊一 (2011) 日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けてー野球ビジネスの日米比較からー A Sustainable Business Model of Minor League Baseball in Japan Based on a Comparison of the US and Japanese Baseball Businesses
 - 4) Arthur T. Johnson (1991) Local Government, Minor League Baseball, and Economic Development Strategies
 - 5) 日本野球機構 統計データ, <<http://npb.jp/statistics/>>
 - 6) 日本野球機構 セ・パ公式戦, <<http://npb.jp/games/>>
 - 7) 日本プロ野球育成選手に関する規約, <http://jpbpa.net/up_pdf/1284364804-662377.pdf#search=%27NPB+%E6%94%AF%E9%85%8D%E4%B8%8B%E7%99%BB%E9%8C%B2%E4%BA%BA%E6%95%B0%27>
 - 8) アメリカ合衆国国勢調査局, <<http://www.census.gov/>>
 - 9) マイナーリーグ HP, <<http://www.milb.com/index.jsp>>
 - 10) ESPN, <<http://espn.go.com/mlb/>>
 - 11) 総務省統計局, <<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm>>
 - 12) ヤクルトスワローズ, <<http://www.yakult-swallows.co.jp/>>
 - 13) 読売ジャイアンツ, <<http://www.giants.jp/top.html>>
 - 14) 阪神タイガース, <<http://hanshintigers.jp/>>
 - 15) 広島カープ, <<http://www.carp.co.jp/>>
 - 16) 中日ドラゴンズ, <<http://dragons.jp/>>
 - 17) 横浜 DeNA ベイスターズ, <<http://www.baystars.co.jp/>>
 - 18) 福岡ソフトバンクホークス, <<http://www.softbankhawks.co.jp/>>
 - 19) 日本ハムファイターズ, <<http://www.fighters.co.jp/>>
 - 20) 千葉ロッテマリーンズ, <<http://www.marines.co.jp/>>
 - 21) 西武ライオンズ, <<http://www.seibulions.jp/>>
 - 22) オリックスバファローズ, <<http://www.buffaloes.co.jp/>>
 - 23) 楽天イーグルス, <<http://www.rakuteneagles.jp/>>
-